

## 景教經典志玄安樂經に就いて

(圖版第六圖 参照)

### 一 緒 言

唐代に行はれた漢文の景教經典の中、今日に現存することの知れて居るのは唯だ五種のみであることは、嘗て自分の述べた如くである。<sup>①</sup>これ等の五種の景典、即ち、(一)、大秦景教三威蒙度讚、(二)、一神論、(三)序聽迷詩所經(序聽迷詩訶經?)、(四)、志玄安樂經、(五)、宣元至本經の中、(一)・(二)・(三)の三種は既にその全部、若しくは一部分が公けにされたが、(四)・(五)の兩種はなほ一般には知られず、此の方面の學徒をして、その公刊の早からんことを希望して惜く能はざらしめたものである。自分は昨年初秋種々の題目を齎して鮮滿から北支に遊んだのであつたが、當時この未刊の兩經をせめて一瞥でもしたいといふことは、その中の重要な一項であつた。従つてこれを收藏せらるゝ李盛鐸氏に對しては、我が内藤博士を始め、中華民國の鬮鐸氏・吳燕紹氏・徐鴻寶氏などを煩はして懇篤な紹介を得、殊に鬮・吳兩氏は態々北平から天津まで赴いて斡旋の勞を執つて呉られたのであつた。李氏が珍藏の愛着を捨てゝ慨然として自分の希望を容れ、單にその一見に止まらず、全卷の抄寫、研究の發表に至るまで、すべて快諾を與へられたのは、氏の學に忠なる所以であると共に、此等諸君子の懇情の賜であつて、今茲にこの一篇を公けにするに當つて、先づこれ等の諸氏に對して深厚なる感謝を捧げなければならぬ。